

## 冥土の飛脚（近松門左衛門）

大阪の老舗の飛脚屋、龜屋の跡継ぎ忠兵衛は、大和の國の老百姓の俸だつたが、故あつて四年前に養子に入り、商賣は覺えたものの、遊興にも馴れ、家業を疎かにして色街に通ひ詰めてゐる。そんな彼が後家の養母には氣懸りでならず、忠兵衛自身も内心使用人任せの商賣を氣にしてもゐるのだが、相思相愛の梅川なる遊女に戀ひ焦れる氣持をどうする事も出来ないでゐると、田舎大盡が金力で梅川を身請けするといふ話が持上る。大金を意の儘に出来ない忠兵衛は切羽詰つて、商賣相手で親友の八右衛門に渡すべき筈の五十兩を店から持出し、梅川の身請けの手附として遊女屋に拂ひ、金の請求に店に訪れた八右衛門には事情を打明け何とか了解して貰ふ。が、不審を抱いた養母から、即刻八右衛門に金を渡せと命じられ、困つた末に陶器の鬚水入れを紙で巻いて小判五十兩に見せかけ、八右衛門に受取つて貰ひ養母を安心させる。

その晩、飛脚が金を龜屋に運んで来るが、その中の三百兩はすぐにも堂島の武家に届けなく

てはならない金であり、忠兵衛はそれを懐ふところにして堂島に向はうとするが、身體は反対方向の色街の方に向いて了ふ。これはいけないと思ひつつも、梅川に會ひたいといふ氣持に負けて、遊女屋に行く。その晩は八右衛門が先に來てゐて、遊女達に鬢水入れを見せて有りの儘を話し、忠兵衛を店に寄せ付けないでくれと頼む。梅川はそれを聞いて泣く。忠兵衛の爲を思つての八右衛門の行爲だつたが、立ち聞きしてゐた忠兵衛は虚榮心を傷つけられ、逆上して八右衛門に食つて掛り、懷中の小判の封を切つて五十兩を八右衛門に叩きつけ、残りの金で梅川を身請けする。「忠兵衛の封印切り」として有名な場面だが、他人の金を勝手に使つた以上重罪は免れず、忠兵衛は梅川に眞實を打明け、手に手を取つて故郷の大和に逃亡するが、既に捕吏ほりの手は回つてゐて、倅を思ふ實父孫右衛門の悲痛な願ひにも拘らず、二人は捕へられて了ふのである。

近松の太才は、世間で評判の事件を「機敏」に把へ、「鋭き觀察眼を以て觀察し、優しい同情を以て忖度そんたくし、麗しい才筆を以て其れを詩化した」點にあると幸田露伴は書いた。簡にして要を得た評言だが、同時に露伴は、近松が「随分嫌な奴」にも公平に同情を示す點に「餘り嬉しくなく思ふところが無いではない」とも書いてゐる。忠兵衛にせよ、「心中天の網島」の治兵衛にせよ、「五重塔」や「ひげ男」を書いた男性的な露伴が「嬉しく」思ふ筈はない。だが、

津田左右吉の云ふ様に、江戸時代の庶民は彼等に甚く同情の涙を注いだのだ。津田は云ふ、「一般の俗衆の善人と見なし同情をよせるのは、常にこの種の、寧ろ憐れむべき人物であつて、確乎たる自信を以て毅然として世と戦ひ、それによつて自己を樹立しようといふ鞏固な人格」は「到底當時の俗衆の領解せざるところであつた」。

無論、當時の俗衆が「憐れむべき人物」に同情を寄せるのには理由があつた。幕府公許の朱子學道徳の息苦しさに反撥して、「人情と云ふものは、はかなく兒子女のやうなるかたなるもの也。すべて男らしく正しくきつとしたる事は、みな人情のうちにはなきもの也」、「もとのありていの人情といふものは、至極まつすぐに、はかなくつたなくしどけなきもの也」と本居宣長は書いたが、忠兵衛も治兵衛も「まつすぐに、はかなくつたなくしどけなく」く突き進んだ。彼等の血は今も我々の體内を確實に流れてゐるが、士魂が地を拂つた今、我々は津田の云ふ「鞏固な人格」なんぞを持合はせてゐる譯ではない。近松の昔も今も、總じて日本は「はかなく兒子女のやうなる」情緒や感傷に溺れ易い國なのである。

(近松淨瑠璃集上、岩波書店)